

児童文学と朗読

佐藤 厚

はじめに

私が小学生の頃「朗読」というと「背中を伸ばし、教科書は目から30cmほど離し、大きな声ではっきりと読む。」であった。辞書的な意味からすると、決して間違った方法ではない。しかし、作品に登場する人物や、作者の気持ちを想像したり、また、その気持ちになって読むにはどうしたらよいか、などといった取り組みは残念ながら、あまり印象に残っていない。

「朗読」は単に言葉を発するだけではなく、作品に対する自分の思いや、感じたことを含め、自分の肉声に乗せて人に伝えるものである。最近では、声に出して読む…ことが一つのブームのようにになっていた。その波に乗って、話し方や朗読もまた密かに流行っている。技術的な面では実に器用に、上手に聞こえる朗読も少なくない。しかし、「情緒豊かに」となると、なんだか物足りなさを感じるのは何故だろうか。

日本人のコミュニケーション能力が、他国に比べてやや低いとされるのは、どうやらこのあたりの「心に届く言葉の表現力」が乏しいところに原因がありそうである。

今回は3つの文学作品を、数人で行う朗読または朗読劇の台本に構成してみた。一人で行う朗読も趣はあるが、集団で行う朗読や朗読劇を通じて、「朗読すること」をより身近に、また楽しく、奥深いものとして感じて頂き、日常の様々な場面で行われる、朗読表現活動にお役立て頂ければ幸である。

1. イメージ（想像）することを楽しむ

児童文学作品は、想像性豊かな作品が多い。登場人物たちの性格や行動も魅力的であり、取り巻く情景描写も豊かである。作品の鑑賞や黙読の段階では個人の内面的活動が主であるが、作品を「朗読する」際は、音声と

なって他者に伝達されるのであるから、朗読する人の個性も加わることになる。

そこで、聞く人の「心に届く言葉」として伝わるようにするには、読み手側の想像力が豊かであることが大切である。では、想像力豊かにする為にはどんな活動をしたらよいのか。

朗読は一人だけで行うものと思っている人も多いのではないだろうか。もちろん一人で行う朗読もあるが、二人以上のグループで行う朗読表現もあってよい。(群読とはまた少々違う。)

ここでは、グループで朗読することでのメリットとその方法の一部を紹介したい。

まず、はじめから、長編に挑む必要はなく、短編や絵本等から始めてみることをすすめたい。グループ内のメンバーと作品全体や登場人物、取り巻く環境(風景、時代背景、物等)について、感想を話し合ってみる。人それぞれ感じ方や理解の仕方が違うので、また、感想を述べやすい雰囲気作りも大切なので、最初は感想についての意見や質問は避けたい。そして、登場人物が「どんな思いなのか、どうしたかったのか。」「何故そのような行動(言動)をとったのか。」等、感情面においても思いを巡らせてみる。その思いを自分の言葉で(声に出して)まわりの人に伝えてみる。また、自分以外の人の感想もよく聴いて、その状況を想像してみる。こうした活動を通じて自分とまわりの人達との「イメージの共有」を行う。様々なイメージの共有で、文字の中にいた人物や背景が生き生きとしてくる。

2. 想像から創造へ

次に、登場人物役とそうでないところを「ナレーター」として役割を決め、皆で声を出して読み合せをする。(参加人数でナレーター役の増減を工夫できる。)また、ナレーション部分でも、人物の心象を表現している言葉があれば、その人物役の人に読ませてみるのもよい。一通り朗読した後、役割を交代する。(できる限り、全員が全役をできることが望ましい。)こうしてグループで何回か朗読しているうちに、同じ作品でも色々なキャラクターや情景描写が現れては来ないだろうか。一つの作品が、多くの人の音声(肉声)を通じて、表現される間に、朗読する人達一人ひとりの作

品に対するイメージがより豊かに深く刻まれることとなる。

ここで、注意して頂きたいことがある。グループで読むと言っても、一人一役であるので、一人で読む事には違いない。「自分のところさえ読めれば・・・」という気持ちではなく、自分が朗読する人物とまわりとの人間関係や、どんな感情や葛藤を抱いているのか等を考慮しながら朗読して頂きたい。そして、ナレーター役も人物の心象をしっかりと感じ取って語って頂きたい。

グループのメンバーそれぞれの思いが互いに繋がり、作品の中で一体化して生き、創造することができるならば、読み手側もまた聞き手側にも深い感動を得ることができるであろう。

グループで、作品を朗読した後、同じ作品を一人で朗読してみよう。その時、語り手は一人であってもグループで培われたものが、自分の中に様々な人物や情景を思い描かせ、情緒豊かに生き生きとした朗読表現がなされるであろう。

3. 故郷の言葉"方言"の持つ力

同じ朗読でも方言を用いての表現は、標準語とは全く違った生活感（生命力）に満ちた暖かい表現となって伝わる。今回は地域性豊かな作品も構成してみたので、もし、関西や東北のご出身の方が、身近にいらっしゃるならば、是非、ネイティブな発音で朗読して頂きたい。最近、言葉の乱れを憂う声も高いが、情報の氾濫で一律化された生活感により、御国言葉が失われつつあることも、大変残念なことである。言葉は「言霊（ことだま）」とも言われてきた。文学作品の朗読を通じて、心から発せられる故郷の言葉を大切に保存していきたいものである。

4. 朗読表現活動を通じて

児童文学作品を、文字が読めるようになった子どもから大人まで、共に朗読表現活動できるならば、世代間交流の場としても、大変有意義なものになる。直接的な世代間の理解にもなるが、作品を通じ、イメージを共有しながら、子どもは大人の豊かな言葉の表現や見識を学び、大人は子どもから、純粹さを再確認し、より深い相互理解となる。また、登場人物の生

き方を通じて、色々な（相手の）立場を考え、感じとることができる。その人物に「なる」ことによって、より高いコミュニケーション能力を身につけることができる。子どもにとって（大人にとっても）、将来の人間関係の基礎が育まれる機会となるであろう。

現代は、「バーチャルリアリティー」なるのもで仮想現実的なことに支配されつつある危機的な状況も否めない。即時的な効果を追うのではなく、人と人との交流の中で朗読表現活動を行って頂きたい。そして、「朗読すること」を通じて一人ひとり、自ら感じ、自らの肉声で伝える力と自信を育み、相互理解を深め、人間として想像性豊かで、健全な人格形成が培われることに期待したい。

ごろはちだいみょうじん

作：中川正文「ごろはちだいみょうじん」

構成台本：佐藤 厚

<登場人物>

- ・ごろはち
- ・ナレーター：N1～4（2人以上で村人、ごいんさんの役も兼ねる）

N 1：ごろはちだいみょうじん いうても、かみさんのことやない。

ごろはち：たぬきのはなしや！

N 2：べんてんはんの もりの ごろはちたちは、えらいてんどしい
の たぬきやった。

N 3：てんどしい いうのは、つまりいたずらもんと いうことや。

N 4：むらのひとやは、きやすう てんどされては かなわんさかい

N 全員：（パンパン！）ごろはちだいみょうじん さまさま！

N 1：いうて たてまつっていただけの ことや。

N 2：たてまつるだけやない。ちょくちょく あぶらげを おそなえ
もうしては、

N 3・4：あんまり わるさ せんでおくなはれや。あんじょう たのん
まっさ。

（全員手を合わせている。）

N 1：ごろはちには、そこが また きにいらんのや。

ごろはち：ふん！だいみょうじんいうてくれるのは かってやが、たぬき
に あぶらげあげるとは なにごとや。きつねと まちごうと
るのと ちがうのかいな。

N 2：たぬきが きつねと いっしょくたにされるのが、よっぽど
くやしうて かなわんらしい。

ごろはち：だいたい きつね みたいに じぶんで ばけてでたり せえ
へんで。

こっちは ちょいと ひとを だますだけの ことや。ずんと
たちが ええで。

N 3：そのとおり、ごろはちは じぶんで ばけんかわりに むらの
ひとやら たいてい いっぺんは だましとる。

N 4：ぜんきょうじの ごいんさんも、ほんどうで おきょうを あ
げようと おもって、

N 1：くわーん

N 4：と かねを たたいたら、えんの したから やっぱり

ごろはち：くわーん！

N 4：と おねじ かねの おとが しよる。

N 1：おきょうのちょうしが くるうさかい、かんにん しとくれ。

ごろはち：ごいんさんが あたまを さげて たのみに きよったのが
ごろはちの じまんや！

N 2：ねていると、

ごろはち： ザザザザザ、ザザザザザ…

N 2：ほうきのおとが きこえてくる。

N 3・4：（こども）だれぞ むらじゅうの みち しっかり はいてく
れとるのやなあ。

N 1：こどもは すぐ かんしん するけど としよりやはらは、ごろ
はちの やりくちを、ちゃんと しょうち したる。

N 1・2：（としより）あほかいな。そうじ みたいな したるもんか。
よが あけたらわかるで。

N 3・4：（こども）よが あけて とんででたら、ほんまや やっぱり
おんなじ ところばかり しっぽで はいとった。

N 1・2：（としより）あないして おそなえの さいそく してはるの
や。

N 3・4：（こども）むらの ひとは、あわてて あぶらげを さげて
はしるのやった。

N 1：こんれいの ばんやら、いちばん あぶない。

N 4：こんれいの さけに よっぱろうて、

N 2・3：♪よいとよーいやまあか どっこいさーのせえ

よいとよーいやまあか どっこいさーのせえ…♪

N 4：なんて ごきげんに なつとると、きっと ごちそうを やられてしまう。

N 2：しゃぁない。ごろはちだいみょうじんさまや。

N 3：そやそや…かえろかえろ。

ごろはち：そう いうたかて、おいらは ただでは ぬすんでいかなのや。

N 1：あくる ひ、めを さましたら、いえの いりぐちに、あけびやら やまぶどうやらを、きちんと かえしとる。

ごろはち：てんごしいでも、きちょうめんな たぬきやないか。

N 2：ところが あるひ、むらはずれで えらい おおさわぎが はじまった。

N 3：おおぜいの ひとが でてきて、はたらきだしとるのや。

N 全員：♪きょうは おてらの ほうじやそうな たいこどんとなりゃにしからくもり はんしょちゃんとなりゃ あめがふるう あそれ、あそれ、あそれ…♪

N 4：けいきの ええ うたを うとうて、つちを はこんだり、じゃりを ならべたりしよる。

ごろはち：へんやなあ。いまごろみちぶしんするはず ないのやが…。

N 1：きになるさかい、そっと のぞきに いったら、

ごろはち：どうや、やっぱり みち みたいな もん できかかっとる。

N 2：できかけの みちには、ながい ながい 2 ほんの てつの ぼうが ひかれてる。

ごろはち：みちに しては、けったいな みちや。どないする みちやろ。

N 3：ごろはちには、よう わからん。

N 1・4：そのうち さくも つくりよったし、

N 2・3：いえも たった。

N 4：そやけど しんぼうして のぞいていたら、

ごろはち：てつどう いうもんつくのやで。 きしゃが とおって、ここに えきが できるのや。

N 4：いうこと ちょっとずつ わかってきたのや。

N 1・2：さむい ひやった。

N 3：べんてんはんの まつりでもないのに、

N 全員：どかん ぱぱぱば ぱあん しゃああ

(実際の花火の効果音でもよい)

ごろはち：あさ はようから はなびが あがるやないか。

N 4：その はなびを あいずに、

N 1：おとこやら おなごやら、

N 2：こどもやら としよりやら、

N 3：みんな よそゆきの ええ きもの きて、

N 1・4：ぞろぞろ でてきよった。

N 2：そして「えき」という ほうへ あるいて いきよるのや。

N 3：てに てに はたまで もって ふっとるさかい、

ごろはち：ははあん。こら きょうは なんぞ ええことあるのやな。

N 4：ごろはちも、じっと してられん。むらの ひとに みつから
んよう、とおまわりして かけつけたのや。

N 1：えきの そばの かれくさの かげに かくれると、

ごろはち：へん。だれよりも さき、いの いちばんに、その きしゃ
というもん みつけたるで。

N 2：めだを いよいよ まるうして まったったが、これが むし
の しらせと いうのやろか。

N 3：このとき ごろはちの むねが、なにやら いつもと ちがう
みたいに、はやがねを うつみたいに、

ごろはち：どっきん どっきん なりだしてきたのや。

N 4：こっちは むらの ひとやらの ほうや。くび なごうして
まっとったら、

N 1・2：あっ！きた！きた！

N 3：せんろの ずっと むこうから、きしゃが きしゃの おとを
たてて やってきよったわ。

N 4：なんや、けむり はいとるで。へんてこりんな もんやのう。

N 1：なんせ うまれて はじめて きしゃを みる ひとたちや。

そんな かぶとむしの おばけ みたいなものを、きしゃとは おもえんのや。

N 2：あーっ！ひょっとしたら こら ごろはちにだまされとるのと ちがうやろか。

N 3・4：ああ さよか。そやそや…。

N 1：と むらの ひとやは わらいだし、いっぺんに せんろの うえに とびだしてきよった。

N 2・3・4：ごろはちい。もう、おまえさんの わるさには ひっかからへ んでえ！

N 1：それを みた ごろはちは、きが きやない。

ごろはち：てんごとちがう！ わるさ したるのやない！ あれは、ほん ものやがな！

N 1：えきちょうさんも とんできて

N 3：みんな、あぶない！こんな ところに おったらひかれるで！

N 2：そやけど おおぜいの ひとの ことや。ちょっと ぐらい となりちらしてもいうことを きいてくれへん。

N 4：きしゃは みるみる そばまで やってきよる。

ごろはち：あかん いうたら あかん。 もうしゃあない！

N 全員：ごろはちは はしってくる きしゃの まえに でんと たちは だかったのや。

N 1：こら。どたぬき むちゃ さらすな。

N 2：きかんしが びっくりして きしゃを とめようと したけど、 まにあわなんだ。

N 4：そのかわり、むらの ひとやらが いっぱい わやわや さわ いどる えきの ちょっと てまえで、がたんと とまってく れたのや。

N 3：おまはんら、この たぬきの おかげで いのちびろい した んやぞ。

N 2：えきちょうさんが ひやあせを ふいて、みんなに いうた。

N 4：そうやったのか。ほなら やっぱり ごろはちは だいみょう じんさまやったのやなあ。

N 1 : つめとうなつた ごろはちの うえに、ぼたんゆきが ぼたぼたと ふりはじめて きよつた。

N 3 : むらの ひとやはらは、べんてんはんの もりに やしろを たてて おまつりしよつた。

N 2 : いちめんにおいなりさんの はたを たてて、あぶらげも わすれずに まいにち おそなえしとる。

N 4 : ごろはちにしたら、

ごろはち : まだ きつねやらと いっしょくたに しとるのかいな。
こっちはたぬきやで。

N 4 : と、くやしがつとる ところやろ。

N 1 : それから、ぜんきょうじの ごいんさんも、ちょいちょい おきょうを あげにきよるのやが、ごろはちは それにも もんくを いうとる ことやろ。

ごろはち : あほらし。ほとけさんと ちがうがな。こっちは れっきとした かみさんや。

だいみょうじん さまさまや ないか。

N 2・3・4 : めでたし めでたし。

N 1 : というたかて

ごろはち : なにが めでたいのやろ？

おしまい。

地 蔵 浄 土

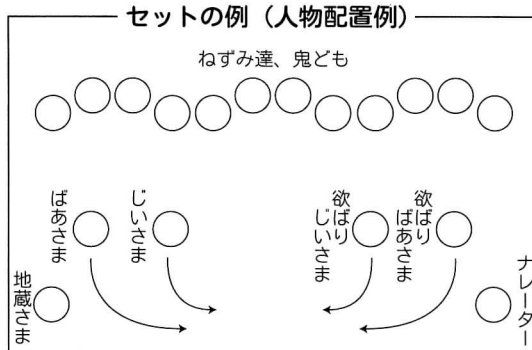
日本民話

関 敬吾 採録

佐藤 厚 構成

キャスト

- ・ナレーター 1 (N 1)
- ・じいさま
- ・ばあさま
- ・地藏さま
- ・嫁ねずみ
- ・ねずみ達・鬼ども (同じ人でよい。坐って小さくなるとねずみ、立上ると鬼。)
- ・欲ばりばあさま
- ・欲ばりじいさま
- ・ナレーター 2 (N 2)



N 1 : 昔、むかし、あるところにじいさまとばあさまがあったそうな。
ある朝、じいさまが土間をはいていると、豆が一粒落ちていた
そうな。

じいさま : ばあさま、ばあさま。豆こ一つめつけたよ。畑さまいて、千粒
にすべか。臼ではたいて黄粉にするべか。

N 1 : 2人で相談していると、じいさまの指の間から、豆がぼろっと
こぼれて、土間の隅っこのねずみ穴に入ってしまったそうな。

じいさま : あれぁ、せっかくひろった豆こなくしたがやい。ばあさま早く
木割りこ持ってきてくだされや。

N 1 : と言って、じいさまは木割りでねずみ穴をほりながら、だんだ
んと奥の方へ入っていったそうな。

じいさま : ♪じじいころがした豆こ見なかったかぁー♪

N 1 : と歌いながら入っていくと、石地藏さまがあったそうな。

じいさま : もしもし地藏さま。わしがころがした豆こ見なかったますか？

地蔵さま：見たっとも。わしがひろって炒って食った。

じいさま：それじゃ良いが、おらぁ家さ行くから……。

N 1：じいさまが帰ろうとすると、地蔵さまは気の毒がって、

地蔵さま：じいさま、じいさま。ちょっとまで。それだけのことはしてやるから。

じいさま：そんだら地蔵さま、何を教えてや？

地蔵さま：ほだからさ。これからじいさまがだんだん奥へ入っていくと、赤い障子が立っていて、ねずみどもがずっぱり、(たくさん)嫁とりの支度をしているから、そこへ行ったら唐臼つきをしてすけもうさい。それから、また奥へ行くと黒い障子が立っていて、鬼どもがずっぱりいて、ばくち打ちをしているから、そこへ行ったら鶏の鳴くまねをして金をさらって来ませや。

じいさま：はい、ありがとがんす。

N 1：と言って奥へ行くと、赤い障子の立っているところがあったそうな。

じいさま：はい、おめんどごわります。おれぁ、こっちに嫁取りがあると聞いて、唐臼つきのすけさ来た。

N 1：と言うとねずみの嫁は、

嫁ねずみ：あれぁ、それぁよいところさ来たます。早く入って助けてがんせ。

N 1：そう言ってじいさまを家に入れたそうな。その家はたいそう立派なところで一の座敷には朱の膳朱の椀に唐銅火鉢、二の座敷にはたくさんの絹の小袖の衣装があったそうな。そして三の座敷に行ってみると、おおぜいのねずみどもが臼に黄金を入れて、じゃくり、じゃくりつきながら、

ねずみ達：♪よいとさのやーえ、よいとさのやーえ、にゃごという声聞きたくねえじゃやえー♪

N 1：と歌っていたそうな。じいさまが唐臼搗きを手伝うと、ねずみどもはたいそう喜んで、美しい絹小袖をたくさんくれたそうな。

N 1：それからまたずっと奥の方へ行くと、黒い障子が立っているところへ行ったそうな。大勢の鬼どもがいて"ビツクタ、ビツ

タクタ"ばくちを打っていたそう。じいさまは見つからないように、そおーと馬やの天井に上がった。夜もふけるとじいさまは蓑をぱたぱたとたたきながら、

じいさま：こけこっこー！

N 1：と鶏の真似をしたそう。鬼どもは、

鬼ども：あれは一番鶏だが？

N 1：じいさまはしばらくしてから、

じいさま：こけこっこー！

鬼ども：あ、あれは二番鶏だか？

N 1：またしばらくしてからじいさまは、

じいさま：こおけこおっこー！

鬼ども：そ、そ、それえー！三番鶏だあー！夜があげたら大ごとだあー！

N 1：銭はそのままそこらにちらかして、我先にどこかへ逃げていってしまったそう。じいさまは馬やの天井からそろそろと降りてきて、そしてばあさまに絹小袖と金を持ってかえり、2人はたいそう喜んでいたそう。

N 2：それをききつけた隣の欲ばりばさま

欲ばりばあさま：いただきますかー？火っこくれねがやー？あれあ、あれあ。うん達やなしてそんなに喜んでおるや。

N 2：とたずねたそう。じいさまとばあさまは、これこれこういうわけで喜んでおる、と言ったそう。

欲ばりばあさま：そりゃまた、なんたらうらやましい話だべ。おらのじいさまもそこへやんべ。

N 2：そう言ってそそくさとかえって行ったそう。そして隣のじいさまと同じように、土間をはいていたが、どうしても豆こが出てこん。そこで大声で、

欲ばりじいさま：ばあー、ばあー、早くその俵から豆こひとつかみもってこ。

N 2：と言って豆こをねずみ穴に入れて、後から木割りで掘って中へ入って行ったそう。すると石地藏さまが坐ってござった。

欲ばりじいさま：ここさ豆がころがってこなかったか。

地藏さま：ああ来たども。あらあひろって食った。

欲ばりじいさま：何たらこの地蔵野郎！人の豆食ったりして。その代わりに絹小袖だの金だのよこせ！

N 2：地蔵さまは、いやなかおをして隣のじいさまに教えた通りのことを教えたそうな。

欲ばりじいさま：♪おれゝ豆を誰ゝ盗んだ。おれゝ豆代よこせ。♪

N 2：と歌いながらしばらく行くと、赤い障子が立っていたそうな。そこではねずみ達が、

ねずみ達：♪よいとさのやーえ よいとさのやーえ にゃごという声聞きたくねえじゃやえー♪

N 2：と歌いながら臼で黄金をついていたそうな。じいさまはそれが欲しくなって、これは猫のまねをしたら、あのたからものをみんなとれるかもしれん。と思って、

欲ばりじいさま：にゃごう にゃーごう！

N 2：と叫ぶと今まで明るかったねずみの家が急に真っ暗になって、何もかも消えてしまったそうな。じいさまはこれはどうしたことだと思いながら、暗がりをはって行くと今度は黒い障子の向こうで“ピタクタ、ピタクタ”と音がした。

欲ばりじいさま：これゝ何だべ。

N 2：のぞいてみると、鬼どもがばくちを打っていたそうな。じいさまは馬やの天井にのぼって隠れていたそうな。そして夜中になると糞を叩いて、

欲ばりじいさま：はぁーっ、一番鶏！

N 2：すると鬼どもはおどろいて、

鬼ども：ありゃあ、何だ？

N 2：とひょうひょう面になったそうな。しばらくしてじいさまは、

欲ばりじいさま：はぁーっ、二番鶏！

鬼ども：ありゃあ、何だ？

欲ばりじいさま：はぁーっ、三番鶏！

鬼ども：何じゃああの声は、ゆうべのにせ鶏だ！おら達の金をさらって行ったが、今夜もまた来ている。ふんづかまえてやれ！

N 2：と言って馬やの天井にのぼって来たそうな。

鬼 ども：このじい！逃がすな！ゆうべもおらの金とったー！

N 2：鬼どもは、ぶったりけったりなぐったり、じいさまは傷だらけになって、おいおい泣きながらかえってきたそう。ばあさまはじいさまの泣き声を聞きつけて、

欲ばりばあさま：あれあれ、おらんちのじいさま、赤い錦の小袖着て喜んで唄うたって来るがぁ。

N 1：欲ばりばあさまは着ていたぼろを脱いで待っていたそう。そこへじいさまが、やっと穴からはいだして来たそう。欲ばりじいさまは傷だらけ。欲ばりばあさまは、はだかんぼ。

N 1・2：なんたら欲ばりはよくねえことだえなぁ。
どーっとはらえい

おしまい。

この劇のやり方

■これはかなり地方色の濃い原作の話法を、ほとんどそのまま朗読劇として構成してある。このような題材は、年齢に関係なく上演の可能性があろうが、語り手、聞き手の理解力にあわせて言葉の言い換えが試みられてよい。

出典：『日本の昔ばなし(1)』（岩波文庫）

注文の多い料理店

原 作：宮沢賢治

構成台本：佐藤 厚

<登場人物>

- ・ナレーター 1：N1
- ・ナレーター 2：N2
- ・若い紳士：A
- ・若い紳士：B
- ・山猫軒の猫たち、犬、猟師：C1、C2（3人以上にしてもよい）

N 1：二人の若い紳士が、すっかりイギリスの兵隊のかたちをして、ピカピカする鉄砲をかついで、白熊のような犬を二匹つれて、だいぶ山奥の、木の葉のかさかさしたところを、こんなことを言いながら、あるいておりました。

A：ぜんたい、ここらの山はけしからんね。鳥も獣も一匹もいやがらん。なんでもかまわないから、早くタンタアーンと、やってみたいもんだなあ。

B：鹿の黄いろな横っ腹なんぞに、二三発お見舞い申したら、ずいぶん痛快だろうねえ。くるくるまわって、それからどたと倒れるだろうねえ。

N 2：それはだいぶの山奥でした。案内してきた専門の鉄砲打ちもちょっとまごついて、どこかへ行ってしまったくらいの山奥でした。

N 1：それに、あんまり山がものすごいので、その白熊のような犬が、二匹いっしょにめまいをおこして、しばらくうなって、それから泡を吐いて死んでしまいました。

A：じつに僕は、二千四百円の損害だ。

N 1：と一人の紳士が、その犬のまぶたを、ちょっとかえしてみ言いました。

- B : 僕は二千八百円の損害だ。
- N 2 : と、もひとりが、くやしそうに、あたまをまげて言いました。
- N 1 : はじめの紳士は、すこし顔色を悪くして、じっと、もひとりの紳士の、顔をつき見ながら言いました。
- A : ぼくはもう戻ろうとおもう。
- B : さあ、ぼくもちょうど寒くはなったし、腹はすいてきたし戻ろうとおもう。
- A : そいじゃ、これで切りあげよう。なかに戻りに、きのうの宿屋で、山鳥を十円も買って帰ればいい。
- B : 兎もでていたねえ。そうすれば結局おんなじこった。では帰ろうじゃないか。
- N 2 : ところがどうも困ったことは、どっちへ行けば戻れるのか、いこう見当がつかなくなっていました。
- N 1・2 : 風がどうと吹いてきて、草はざわざわ、木の葉はかさかさ、木はごとんごとんと鳴りました。
- A : どうも腹がすいた。さっきから横っ腹が痛くてたまらないんだ。
- B : ぼくもそうだ。もうあんまりあるきたくないな。
- A : あるきたくないよ。ああ困ったなあ、何か食べたいなあ。
- B : 食べたいもんだなあ。
- N 1 : 二人の紳士は、ざわざわ鳴るすすきの中で、こんなことを言いました。
- N 2 : その時ふとうしろを見ますと、りっぱな一軒の西洋造りの家がありました。そして玄関には、
- A : RESTAURANT。
- B : 西洋料理店。
- A : WILDCAT HOUSE。
- B : 山猫軒。
- N 2 : という札がでていました。
- A : 君、ちょうどいい。ここはこれでなかなか開けてるんだ。入ろうじゃないか。
- B : おや、こんなところにおかしいね。しかしとにかくなにか食事が

できるんだろう。

- A : もちろんできるさ。看板にそう書いてあるじゃないか。
- B : 入ろうじゃないか。ぼくはもう何か食べたくて倒れそうなんだ。
- N 1 : 二人は玄関に立ちました。玄関は白い瀬戸の煉瓦で組んで、じつにりっぱなもんです。そして硝子の開き戸がたって、そこに金文字でこう書いてありました。
- C 1 : どなたもどうかお入りください。決してご遠慮はありません。
- N 2 : 二人はそこで、ひどくよろこんで言いました。
- A : こいつはどうだ、やっぱり世の中はうまくできてるねえ、きょうの一日はなんぎしたけれど、こんどはこんないいこともある。このうちは料理店だけれども、ただでご馳走するんだぜ。
- B : どうもそうらしい。決してご遠慮はありません、というのはその意味だ。
- N 1・2 : 二人は戸を押して中へ入りました。
- N 1 : そこはすぐ廊下になっていました。その硝子戸の裏側には、金文字でこうなっていました。
- C 2 : ことに肥ったお方や若いお方は、大歓迎いたします。
- N 2 : 二人は大歓迎というので、もう大よろこびです。
- A : 君、ぼくらは大歓迎にあたっているのだ。
- B : ぼくらは両方兼ねてるから。
- N 2 : ずんずん廊下を進んで行きますと、こんどは水いろのペンキ塗りの扉がありました。
- B : どうも変な家だ。どうしてこんなにたくさん戸があるのだろう。
- A : これはロシア式だ。寒いとこや山の中はみんなこうさ。
- N 1 : そして二人はその扉をあけようとしますと、上に黄いろな字でこう書いてありました。
- C 1 : 当軒は、注文の多い料理店ですから、どうかそこはご承知ください。
- B : なかなかはやってるんだ。こんな山の中で。
- A : それゝそうだ。見たまえ、東京の大きな料理屋だって大通りには少ないだろう。

- N 1 : 二人は言いながら、その扉をあけました。するとその裏側に、
- C 2 : 注文はずいぶん多いでしょうが、どうかいちいちこらえてください。
- B : これはぜんたいどういうんだ。
- N 2 : 一人の紳士が顔をしかめました。
- A : うん、これはきっと注文があまり多くてしたくが手間取るけれども、ごめんくださいと、こういうことだ。
- B : そうだろう。早くどこか室の中に入りたいもんだな。
- A : そしてテーブルにすわりたいもんだな。
- N 1 : ところがどうもうるさいことは、また扉が一つありました。そしてそのわきに鏡がかかって、その下には長い柄の付いたブラシが置いてあったのです。扉には赤い字で、
- C 1 : お客さま方、ここで髪をきちんとして、それからきものの泥を落としてください。"
- N 1 : と書いてありました。
- A : これはどうももっともだ。ぼくもさっき玄関で、山の中だともって見くびったんだよ。
- B : 作法のきびしい家だ。きっとよほど偉い人たちがたびたび来るんだ。
- N 1・2 : そこで二人は、きれいに髪をけずって、靴の泥を落としました。
- N 2 : そしたら、どうです。ブラシを板の上に置くやいなや、そいつがぼうとかすんで無くなって、風がどうっと室の中に入ってきました。
- N 1 : 二人はびっくりして、たがいによりそって、扉をがたとあけて、次の室に入って行きました。
- A・B : 早く何か暖かいものでも食べて、元気をつけておかないと、もう途方もないことになってしまう
- N 1・2 : と、二人ともおもったのです。
- N 2 : 扉の内側に、また変なことが書いてありました。
- C 2 : 鉄砲と弾丸をここへ置いてください。
- N 1 : 見るとすぐ横に黒い台がありました。

- A : なるほど、鉄砲を持ってものを食うという法はない。
- B : いや、よほど偉い人がしじゅう来ているんだ。
- N 2 : 二人は鉄砲をはずし、帯皮を解いて、それを台の上に置きました。
- N 1 : また黒い扉がありました。
- C 1 : どうか帽子と外套と靴をおとりください。
- B : どうだ、とるか。
- A : しかたない、とろう。たしかによっぽど偉いひとなんだ。奥に来ているのは。
- N 1 : 二人は帽子とオーバーコートを釘にかけ、靴をぬいでべたべたあるいて扉の中に入りました。すこし行きますとまた扉があって、その前に硝子の壺が一つありました。
- N 2 : 扉にはこう書いてありました。
- C 2 : 壺の中のクリームを顔や手足にすっかり塗ってください。
- N 2 : 見るとたしかに壺の中のものは牛乳のクリームでした。
- A : クリームを塗れというのはどういうんだ。
- B : これはね、外がひじょうに寒いだろう。室の中があんまり暖かいとひびが切れるから、その予防なんだ。どうも奥には、よほど偉いひとが来ている。こんなとこで、案外ぼくらは、貴族とちかづきになるかもしれないよ。
- N 1 : 二人は壺のクリームを、顔に塗って手に塗って、それからから靴下をぬいで足に塗りました。それでもまだ残っていましたから、それは二人とも、めいめいこっそり顔へ塗るふりをしながら
- A ・ B : 食べました。
- N 2 : それから大急ぎで扉を開けますと、その裏側には、
- C 1 : クリームをよく塗りましたか。耳にもよく塗りましたか。
- N 2 : と書いてあって、ちいさなクリームの壺がここにも置いてありました。
- A : そうそう、ぼくは耳には塗らなかった。あぶなく耳にひびを切らすとこだった。この主人はじつに用意周到だね。

- B : ああ、細かいとこまでよく気がつくよ。ところでぼくは早く何か食べたいんだが、どうもこうどこまでも廊下じゃしかたないね。
- N 1 : するとすぐその前に次の戸がありました。
- C 2 : 料理はもうすぐできます。十五分とお待たせはいたしません。すぐ食べられます。早くあなたの頭に瓶の中の香水を、よく振りかけてください。
- N 1 : そして、との前には金ピカの香水の瓶が置いてありました。
- N 2 : 二人はその香水を、頭へぱちゃぱちゃ振りかけました。ところがその香水は、どうも酢のような匂いがするのですでした。
- B : この香水はへんに酢くさい。どうしたんだろう。
- A : まちがえたんだ。下女が風邪でもひいてまちがえて入れたんだ。
- N 1・2 : 二人は扉をあけて中に入りました。
- N 1 : 扉の裏側には、大きな字でこう書いてありました。
- C 1 : いろいろ注文が多くてうるさかったでしょう。お気の毒でした。もうこれだけです。
- C 2 : どうかからだじゅうに、壺の中の塩をたくさんよくもみこんでください。
- N 2 : なるほどりっぱな青い瀬戸の塩壺は置いてありましたが、こんどというこんどは二人ともぎょっとしておたがいにクリームをたくさん塗った顔を見合わせました。
- A : どうもおかしいぜ。
- B : ぼくもおかしいとおもう。
- A : たくさんの注文というのは、向こうがこっちへ注文してるんだよ。
- B : だからさ、西洋料理点というのは、ぼくの考えるところでは、西洋料理を、来た人に食べさせるのではなくて、来た人を西洋料理にして、食べてやる家ということなんだ。
- A : これは、その、つ、つ、つ、つまり、ぼ、ぼ、ぼくらが……。
- N 1 : がたがたがたがた、ふるえだしてもうものが言えませんでした。
- B : その、ぼ、ぼくらが、……うわあ。

- N 2：がたがたがたがた、ふるえだして、もうものが言えませんでした。
た。
- A・B：にげ……。
- N 1：がたがたしながら一人の紳士はうしろの戸を押そうとしましたが、どうです、戸はもう一分も動きませんでした。
- N 2：奥の方にはまだ一枚扉があって、大きな鍵穴が二つつき、銀いろのホークとナイフの形が切りだしてあって、
- C 1：いや、わざわざご苦労です。たいへん結構にできました。さあさあおなかにお入りください。
- N 1：と書いてありました。おまけに鍵穴からはきょろきょろ二つの青い眼玉がこっちをのぞいています。
- A・B：うわあ。
- N 1・2：がたがたがたがた。
- A・B：うわあ。
- N 1・2：がたがたがたがた。
二人は泣きだしました。
- N 2：すると戸の中では、こそこそこんなことを言っています。
- C 2：だめだよ。もう気がついたよ。塩をも見こまないようだよ。
- C 1：あたりまえさ。親分の書きようがまずいんだ。あすこへ、いろいろ注文が多くてうるさかったでしょう、お気の毒でしたなんて、間拔けたことを書いたもんだ。
- C 2：どっちでもいいよ。どうせぼくらには、骨も分けてくれやしないんだ。
- C 1：それはそうだ。けれどももしここへあいつらが入ってこなかったら、それはぼくらの責任だぜ。
- C 2：呼ぼうか、
- C 1：呼ぼう。おい、お客さん方、早くいらっしゃい。
- C 1・2：いらっしゃい。いらっしゃい。
- C 2：お皿も洗ってありますし、菜っ葉ももうよくもんでおきました。あとはあなたがたと、菜っ葉をうまくとりあわせて、まっ白なお皿にのせるだけです。早くいらっしゃい。

- C 1・2：へい、いらっしやい、いらっしやい。
- C 1：それともサラダはおきらいですか。そんならこれから火をおこしてフライにしてあげましょうか。
- C 2：とにかく早くいらっしやい。
- N 1：二人はあんまり心を痛めたために、顔がまるでくしゃくしゃの紙くずのようになり、おたがいにもその顔を見合わせ、ぶるぶるふるえ、声もなく泣きました。
- N 2：中では、ふっふっとわらってまた叫んでいます。
- C 2：いらっしやい、いらっしやい。そんなに泣いてはせっかくのクリームが流れるじゃありませんか。
- C 1：へい、ただいま。じきもってまいります。さあ、早くいらっしやい。
- C 2：早くいらっしやい。
- C 1：親方がもうナプキンをかけて、
- C 2：ナイフをもって、
- C 1：舌なめずりして、
- C 1・2：お客さま方を待っています。
- N 1・2：二人は
- A :泣いて
- B :泣いて
- A :泣いて
- B :泣いて
- A・B：泣きました。
- N 1：そのときうしろからいきなり、
- C 1・2：わん、わん、ぐわあ。
- N 1：という声がして、あの白熊のような犬が二匹、扉をつきやぶって室の中に飛びこんできました。
- N 2：鍵穴の眼玉はたちまちなくなり、犬どもはうとうとなつてしばらく室の中をくるくるまわっていましたが、また一声
- C 1・2：わん。
- N 2：と高く吠えて、いきなり次の戸に飛びつきました。

- N 1：扉はがたりと開き、犬どもは吸いこまれるように飛んで行き
ました。
- N 2：その扉のむこうのまっくらやみの中で、
- C 1・2：にゃあお、くわあ、ごろごろ。
- N 2：という声が出て、それからがさがさ鳴りました。
- N 1：室はけむりのように消え、二人は寒さにぶるぶるふるえて、草
の中に立っていました。
- N 2：見ると、上着や靴や財布やネクタイピンは、あっちの枝にぶら
さがったり、こっちの根もとにちらばったりしています。
- C 1・2：風がどうと吹いてきて、草はざわざわ、木の葉はかさかさ、き
はごんごんと鳴りました。
- N 1：犬がふうとうなっていると戻ってきました。そしてうしろからは、
- C 1：旦那あ、旦那あ。
- N 1：と叫ぶものがあります。
- N 2：二人はにわかに元気がついて、
- A・B：おおい、おおい、ここだぞ、早く来い。
- N 2：と叫びました。
- N 1：蓑帽子をかぶった専門の猟師が、草をざわざわ分けてやって
きました。
- N 2：そこで二人はやっと安心しました。そして、
- A：猟師のもって来た団子を食べ、
- B：途中で十円だけ山鳥を買って
- N 2：東京に帰りました。
- N 1：しかし、さっき一ぺん紙くずのようになった二人の顔だけは、
- A：東京に帰っても、
- B：お湯に入っても、
- 全 員：もうもとのとおりになおりませんでした。

おしまい。